

Title	日本史修士論文要旨；東洋史修士論文要旨；西洋史修士論文要旨；民族学考古学修士論文要旨；二〇〇一年度卒業論文題目；三田史学会常任委員・委員
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	2002
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.71, No.4 (2002. 11) ,p.166(644)- [188(666)]
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20021100-0166

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

〔日本史修士論文要旨〕

勝海舟の対外思想とその背景

金澤 裕之

本論文は、幕末・明治期における勝海舟の対外思想、特に対アジア政策論のあり方、及びその変遷の過程を明らかにすることを目的とする。

海舟の対外思想を巡っては、研究史上、交易論的アジア連帯論、もしくは軍事的アジア侵略論と評価が分れる。先行研究における問題は、どの研究も海舟の立場、時代背景の変化を考慮せず、その思想を終始一貫したものと評価している点にある。そこで、本論文では便宜的に海舟の生涯を、一、生誕〜御番入り前後、二、軍艦奉行並登用前後〜駿府下向、三、明治政府への出仕〜死去、の三期に分けて考察した。

まず青年期における思想形成の背景には、鉄砲同心という家筋、経済官僚を数多く輩出した父の実家男谷家、自身の蘭学修行、特に地理学者である永井青崖への師事と専門分野として選んだ洋式砲術、渋田利右衛門、竹川竹齋ら全国の豪商達との交際、という経済面・軍事面双方の要素が認められ、少なくとも嘉永六年の段階では「海外交易の利潤↓近代海軍の建設費用↓整備した艦隊を利用した海外交易」という理論が確立された。

軍艦奉行並に登用され幕府海軍の建設、摂海防御について絶大な権限が与えられた文久期には、経済・軍事という二つの側

面のうち、後者への傾斜が強まる。特に桂小五郎・大島友之允ら長州・対馬藩尊攘派との接触は、海舟の対外思想に対外膨張論的な要素を加える。日朝通交関係刷新運動における「征韓」・「伏韓」といった言説は、その最たるものであると言える。

しかしその路線は、禁門の変による海舟の失脚で挫折、それ以降の言説は再び嘉永六年段階の交易論的なものに回帰してゆく。明治期の対外思想は、明治八年を境に大きく変化する。海軍大輔・卿として参与した台湾出兵では、出兵反対の姿勢をとるものの、その理由は多分に時期・技術面にあり、出兵そのものへの反対ではない。従来出兵反対の根拠とされてきた参議兼海軍卿辞任も、海軍省での影響力低下の為であり、連帯論の根拠にはならない。それが明治八年に下野してからは、日清戦争反対に見られるような連帯論に再び変容する。また、その内容はそれまでの富国強兵論的な交易論、あるいは侵略論に留まらず、「アジアの連帯↓欧米列強の侵略への抵抗」というアジア全体を政治単位として意識したものに発展したものであった。

このように、海舟の対外思想は、アジア連帯論、あるいはアジア侵略論と一括りに評価できるものではなく、「近代海軍の整備」を軸に、その立場・時代背景によつて常にアジア交易論・侵略論の双方を行き来していたと行うことができる。

絵のなかに跳ねる兎たち

—明治初期の「兎絵」を素材として—

富越 薫子

本稿は、明治初期にみられる、流行とメディアの相互作用を検証することを目的としている。

この一例として、東京府における兎の投機的売買流行という出来事と、当時のメディアの中で重要な位置を占めていた錦絵「兎絵」を中心にとりあげ、これによって、近世と、開化後の近代の「文化」に質的な差があるのではないかと考察するのが、本稿の主題である。

江戸後期以来、「瓦版」などの報道性を持った媒体の発達と、人々の情報に対する関心の増大によって、明治期までには一種の「報道的メディア」＝ジャーナリズムと呼べるものが登場していた。ただし、この段階でのジャーナリズムとは、あくまでも、娯楽的要素を含んだ、人々の耳を楽しませる情報であった。ゆえにいわゆるサブカルチャー的分野を中心に発展していたのだが、このサブカルチャー分野における情報伝達形態を仮に、「明治初期的メディア」と名づけ、これにのること、拡大していったのが、兎の流行の特徴であると考えた。

論文ではまず第一章において、「兎絵」以前に描かれた兎の形象、及び、幕末明治の風刺画史を確認した。これを前提に、第二章においては、「兎絵」に反映される、肯定的な兎売買観

や、当時の兎が担っていた、「開化の象徴」たる意味付けなどを見、また、次第に娯楽的色彩が強くなっていくという、時系列による画題の変化を追いかけることで、「兎絵」が伝えた情報を分析した。第三章においては、「兎絵」以外の分野に登場する兎流行をもとに、「明治初期的メディア」間相互の交流を描き、その特性について定義した。

一方、第四章では、明治の近代化の中で「客観的情報伝達」を重視する「近代的ジャーナリズム」と、これを支える新たな技術が登場する中で、従来の「明治初期的メディア」そのものが、次第に力を失っていくことを指摘した。これに伴い、かつては「開化的な事物」であった兎が、取巻く文化事象ごと時代遅れの印象になり、兎への投機的取引もまた「前近代的・未開的行動」との意識が生まれ、魅力が失われたことが、「東京府によって繰り返される取締り」以上に流行の衰退に影響したのであろうとの結論を出した。

以上の観点からみた兎の流行とは、近世から近代への転換の瞬間に、「メディア」の連携によって支えられた、ひとつのムーブメントであったと、位置付けられる。このことは同時に、幕末から明治初期においての、娯楽と非常に結びついた「明治初期的ジャーナリズム」から、『近代的』『客観的』な事実の伝達」をめざすジャーナリズムへの変遷、および、これと密接に関係する文化そのものの、質的な変化をもまた、示しているのではないかと、考えられるのである。

『日本靈異記』における仏教施設についての基礎的考察

藤本 誠

本論文では、八世紀後半から九世紀にかけて、『日本靈異記』（以下『靈異記』）に見え、古代在地社会の中核的な仏教施設の一つであったと考えられる「堂」について、『靈異記』の基礎的な整理に基づき、『靈異記』から窺えるあらゆる材料を駆使しながら考察を行った。その際、仏教説話集である『日本靈異記』の史料性格を十分踏まえながら考察することに留意した。

第一章「『日本靈異記』の論理と構造——『靈異記』にみえる僧侶の呼称の分析を中心として——」では、中巻七縁における行基と智光の呼称が、説話内で使用される位置や説話内容などと密接に関わって使い分けられていたことを、『靈異記』全体の用例と網羅的に比較することにより検証し、それが『靈異記』全体に流れる一貫した論理であったことを指摘した。

第二章「『日本靈異記』における仏教施設についての基礎的考察——「堂」を中心に——」では、「寺」と「堂」の相違点について、第一章で明らかにした説話の論理を踏まえた上で、経済的基盤・伽藍形態・僧侶の存在形態などを切り口として論じた。その結果、①下巻二三縁の分析から「寺」は自立的な経営主体と成り得たのに対して、「堂」は表向きにも自立した経営主体として成立していなかったと考えられること、②上巻五縁の

「豊浦堂」についての検討から、認識レベルにおいても「寺」と「堂」は区別されるものだったこと、③下巻一七縁と二八縁の比較検討から、「寺」と「堂」は伽藍と宗教者の存在形態において異なっていたと考えられること、を指摘した。したがって、『靈異記』に見える「寺」と「堂」は、その造営主体間において明確な経済的格差が存在し、それが各仏教施設の存在形態や居住する僧侶の存在形態をも規定していたと結論づけることができる。

第三章「日本古代前期における「堂」についてのノート」では、日本古代前期における「堂」の用例と古代中国における「堂」の用例との比較検討を行った。その結果、古代中国における「堂」は、「高殿である立派な建物」という語源に遡る意味を踏まえて使われていたのに対し、古代日本では殆どが「仏堂」を示す用例であったことから、日本古代前期における官人層・僧侶は、「堂」が古代中国で「高殿」という建物の構造を表す語であったことを理解しながらも、単なる仏教施設を表す語として受容したと推測した。したがって、『靈異記』に見える「堂」が単なる仏教施設を表す語として使用されていたことも自ずと明らかとなった。

終章では本論文全体の結論として、①個々の説話は『靈異記』編纂以前の原史料が本になっていることが多いにも関わらず（序章）、使用されている用語は共通の論理によって使い分けられていることから（第一章）、『靈異記』研究の方法論として、説話内部の論理と説話集全体の論理を十分踏まえることが

重要であること、②従来の古代仏教史研究においては、史料の制約から在地仏教の階層性が軽視されてきたが、本論文第二章における考察結果に加え、近年の考古学の成果によって八世紀後半から九世紀にかけて、所謂「村落内寺院」と呼ばれる仏教施設の存在が判明したことから、今後の在地仏教の研究は、在地仏教世界の階層性とそれを前提とした重層性を踏まえなければならぬことを指摘した。

戦国大名間外交における「取次」

丸島 和洋

近年の中近世移行期研究においては、権力の意志形成と伝達を考える手段として、取次者の研究が盛んになっている。本修士論文は甲斐武田氏を主たる素材として、戦国大名同士が外交交渉を行う際の取次者（以下「取次」）について検討を行ったものである。

第一章では先行研究整理の意味を込めて、上杉―後北条同盟（越相同盟）を取り上げた。ここで問題としたのは交渉ルート（「手筋」）である。従来越相同盟には「実務的なルート」と「儀礼的なルート」という目的の異なる二つの交渉ルートが設定されたとされ、その後の研究で一般化が図られている。これに対し、文書の機能論を組み合わせた観点から検討を行った。その結果交渉ルートの併存はあくまで極初期に限定され、交渉

の過程で整理・統合されることが明らかとなった。複数の交渉ルート併存は一般化しえるものではないのである。また「儀礼的ルート」という性格づけについては、それが成しえないことを指摘した。

第二章・第三章では、甲斐武田氏を題材に、「取次」について論じた。まず第二章では史料の豊富に残存している对上杉氏外交（甲越同盟）を題材とし、宿老（準一門）と側近層とが「取次」として併存していること、後者がより詳細な交渉を担っていることを指摘した。続いて第三章では前章の検討の一般化と意義付けを図り、武田氏外交の「取次」は一門・宿老（準一門）と側近の組み合わせで形成されるのがひとつの形であったことを指摘した。側近は大名への披露を行う際に不可欠であり、また大名の「内意」を把握した存在として交渉の機微に携わった。一方の一門・宿老は交渉の信頼性を支える存在であったと考えられる。

補論一としては後北条氏の事例を検討した。後北条氏の場合一門が前面にたつて交渉に当たっており、当主側近は補完的な立場であったことを指摘した。武田氏との差異は、両者の権力構造の相違と関係していると考えられる。続けて補論二として、後北条氏を題材に、「取次」の外交書状が大名の指定した文案に沿って作成される事例を紹介し、その意味を考えた。

「取次」として所見される者は、領国支配においても活発な活動が確認される。彼らこそ、戦国大名権力の中枢構成員と位置付けられるのではないだろうか。

近世世代移行期

京都における民衆と朝廷

吉岡 拓

近代国家としての日本の特質を考える上で近代天皇制研究が不可欠であることは自明であるが、私は中でも「民衆の天皇観」について検討することこそがそれに最も益することであると信じる者である。以上のような立場から、修士論文では近世近代移行期の京都の民衆の天皇・朝廷観、そしてその天皇・朝廷観がいわゆる近代天皇制イデオロギーの受容に果たした意味について検討を試みた。先行研究においては近世近代移行期の民衆は天皇・朝廷を「生き神」視していたこと、そのような視角が近代天皇制イデオロギーの受容に大きく関わっていた、というのが一般的な見解であったが、修士論文はそれらとは異なつた側面を提示することとなる。

第一章は明治二年一〇月の皇后東京行啓に対して行われた京都町人による行啓反対活動について分析した。町人達には天皇・朝廷という存在を自身の生活・渡世の成り立ちという観点から捉えるという共通した視点が常に見られた。このことは当期の京都町人にとって天皇・朝廷とは日常の中に根付いた存在、そしてそれ故に利益的な存在でもあったことを示しているものと思われる。

第二章では一章で得た知見を踏まえて、近世中・後期におけ

る京都町人の天皇・朝廷観の把握を試みた。町触と祇園祭の山鉾町の一つ・占出山町への禁裏御所からの菊御紋附提灯寄附の事例を素材に検討を行い、そこから町人達が天皇や公家が体現した権威を利用して自身を利そうとする狡猾さを有していたこと、その権威とは近世身分制社会固有の身分意識に淵源されるものであることなどを指摘した。

第三章では惟喬親王との由緒を唱える、大原の地に居住した郷士達の天皇・朝廷観について分析した。惟喬親王との由緒は郷士達の郷内における地位の動揺の中から主張されてきたものであり、維新以後はその由緒が維新政府に出仕するための口実として用いられること、後者の過程で郷士達の中に徐々に尊皇意識が培われていくことを明らかにした。

以上三章の検討を通して、近世近代移行期における京都の民衆は天皇・朝廷をかなり世俗的で利益的な存在として捉えていたこと、そのような視点が結果的に近代天皇制受容につながる可能性を有していた、ということを結論的に述べた。

残された課題も多いが、課題が明確化したことだけでも試みとしては成功であったと信じた。

「ヤフヤー・ドウラトアーバーデーと近代シーア派
ウラマー社会」

北川 修一

本論文は19世紀後半のイラン・イラクにおける一人のシーア派ウラマー（イスラーム法学者）の実態と時代的経験に関する論文である。19世紀末から20世紀初頭にかけて新式教育普及に尽力したウラマー、ヤフヤー・ドウラトアーバーデー（1863—1936）の回想録、Hayat-e Yahyaを主要史料として使用し、語り手であるドウラトアーバーデーにスポットを当て、彼の見聞や実体験をもとに当時のウラマー・コミュニティの実態について言及した。

本論文の構成は3章からなり、ドウラトアーバーデーが青少年期にウラマー候補生として学習活動に従事していたイラク、エスファハーン、テヘランでのウラマー社会についてそれぞれの章で取り上げる。1章ではナジャフを中心としたシーア派の聖地におけるイラン人ウラマーの影響力とシーア派最高権威であるマルジャエ・タグリードの本質について、2章ではエスファハーンにおける正統派ウラマーと神秘主義的影響を受けた下層ウラマーの対立構造、下層ウラマーの近代的な知との遭遇、3章では1891—92年のタバコ・ボイコット事件に関するドウラトアーバーデーのコメントからテヘランのウラマー・

コミュニティの権威構造の変容について論じた。

そして全ての章を通じて、イランのシーア派ウラマーは19世紀後半という時代の中でどのような経験を経ていたかをドウラトアーバーデーの事例に則して提示した。ウラマーが政治的、社会的に関与した1906年の立憲革命以前にウラマー、とりわけ比較的下層のウラマーはどのような経験をし、時代的な事象に関してどのような考えをもちながら成長し、ウラマー社会と関わったかを明らかにしたつもりである。

虢国墓制考

—晋侯墓地との比較を中心として—

文学研究科史学専攻（東洋史分野）高階 審太郎

本論は、西周末期から春秋初期にかけて、春秋期を通じて栄えていく晋や鄭と並ぶ勢力を誇りながら、先んじて滅亡してしまふ虢を題材に、その滅亡の本質的要因及び西周期にかけての社会の特性について、文献資料の検討と墓性の考察によって探ることを目的とする。まず、虢に関する先行研究を概観し、名称や所在、地位に関する議論や個別の遺物を使用した研究はみられるが、墓制全体の考察や他の墓葬との詳細な比較研究はみられないことを述べた。つづいて、文献史料から虢の変遷を考察し、虢が周王室の出で、内服諸侯として王畿内に複数の所領を有し、西周末期から春秋初期にかけて周王朝の重臣として常

に権力の中枢にあったことを確認した。そして、考古資料を利用し、虢国墓地と晋侯墓地について、全体の墓制、墓坑形式、棺槨、被葬者の状態、人殉・殉牲および祭祀坑、埋納青銅容器数とその内訳、明器の組合せとその内訳の各項目に関する比較検討をおこない、同時期の諸侯という同階層の墓葬でありながら両国の墓葬には多くの異なる点があることを検証した。

その違いの最大の理由は、虢と晋の立地上の問題、地理的要因に拠るものであろう。虢が周王朝の内服諸侯として王畿内に所領を有し、在地に自分たちと異なるグループが存在せず、血縁と序列意識を重視し続けたのに対して、晋は外服諸侯として王畿外に封ぜられ、在地に自分たちと異なるグループが存在し、その人々と緊張関係の中で折り合いをつけ、血縁よりも地縁を重視することになったのではないだろうか。西周末期から春秋初期にかけての社会は、周への序列意識からぬげだせず、周王朝内での権力の維持にとどまった虢に代表される「古いタイプの国」が、周への序列意識を弱めてその権威のみを利用し覇者となる晋に代表される「新しいタイプの国」にとって替わられていく過渡期にあたるのである。

民国初期天津における「社会教育」と「衛生」

戸部 健

中国近代教育史において学校教育に関する研究は数多くなき

れている。しかし学校教育で対象とされない多くの民衆に対する教育である社会教育については、依然として研究が少ない。その中でも主に民間主導で行われた平民教育、鄉村教育に関しては確かな研究実績があるが、国家主導で行われた「社会教育」に関するものは皆無に近い。本稿は民国初期中国における「社会教育」の展開を検討したものである。

社会教育とは今日では「学校以外における、国民の自発的な学習活動」とされているが、本稿で検討する「社会教育」とは「国家の主導的な介入によって行われた社会教育」のことをさす。「社会教育」は一九世紀後半から列強各国によって注目され、「近代国家」の一要素として発展することになる。

袁世凱総統の下、北京に成立した中華民国政府も「近代国家」を目指し、「社会教育」を推進していく。その目的は民衆の知識を高めるということにあつたのはもちろんであつたが、重要なのはむしろ民衆の思想を統制して治安の維持をはかることにあつた。中央によるこうした動きはもちろん地方にも及び、本稿で扱った天津においても「社会教育」は広範に行われていたことが確認できた。しかしその実態は清末より紳商を中心に行われていた通俗教育という民衆教育を制度化の下に取り込んだものであり、決して中央集権的なシステムが構築されたわけではなかつた。そのため「社会教育」に対する考え方において中央と地方で矛盾が起り、時に中央の政策がスムーズに遂行できないこともあつた。例えば天津「社会教育」における「衛生」の教育は、国民の健康の向上、外国からの嘲笑の回避など

を意図したものであり、活発な活動が行われていたが、病気の説明に関しては中医によるものがほとんどで、中国伝統医学的な内容が目立った。そのような教育は、西洋医学を基礎に統一した見解で行われた政府の防疫活動との間に明らかに矛盾を生じ、防疫活動を阻害していた場合もあったのである。

近年北京政府再評価の声が高まっているが、それらで述べられている北京政府の政策が地方においていかなる展開を見せたのかを検討したものはまだ少ない。本稿は「社会教育」を検討することで、そうした問題に取り組んだものであり、今後警察や衛生などについても検討することで、中央、地方を含んだ北京政府の具体像が見えてくるかもしれない。それは今後の課題となる。

〔西洋史修士論文要旨〕

17世紀初頭におけるスーラト商館設立とその要因

—イギリス東インド会社を事例として—

川端 直子

本稿は、17世紀にイギリス東インド会社がインドとの交易を開始した際、最初の貿易拠点として選ばれたスーラトを取り上げ、その商館設立の背景について論じるものである。インド亜大陸の北西に位置するグジャラートの港市、スーラトへの商館設立の要因を考察することによって、イギリス東インド会社が

どのようにインド洋交易圏に参入し、そして成功をおさめたのかという問題を、同時代史料に基づいてあきらかにすることを試みた。

スーラト商館設立の背景とその経緯を詳細に検討した結果、かならずしも同時代史料に依拠せずに語られてきた従来イメージとは異なり、17世紀初頭においても、ポルトガルはインド洋において依然として強力な海軍力を有していたことが分かった。1600年に設立されたばかりで、資本金も少なく、また海軍力も脆弱であったイギリス東インド会社にとって、ポルトガルが16世紀初頭から100年以上の歳月をかけてインド洋一帯に築き上げた貿易網の中に参入し、独自の貿易網を確立することは至難の業であった。東南アジアでグジャラト産の綿織物の需要が高いという情報を受けて、船団をグジャラトに向けたものの、その際、強調されたことは、ポルトガルの支配下に置かれていない港を探し出すことであった。ポルトガルは、広大なインド洋交易圏の中でも、現地の貿易網を統制することに比較的成功していたグジャラトにおいて、デイウ、ダマン、バッセインに要塞を築いていた。そのため、イギリスの船団はこれらの港に接近することさえ覚束なかった。そのような状況において、スーラトは、タプティ河に面していることから、商業活動がさかんであるばかりか、在地の支配者の政治的手腕や広大な版図を有するムガル朝の一部であったことも手伝ってポルトガルの勢力が比較的及んでいない稀有な地域であったのである。17世紀初頭のインド洋交易圏におけるポルトガルの影響力

の地域差が、イギリス東インド会社をして、スーラトに向かわせることになったのである。

バグダード入城までのセルジューク集団

小林 正史

5/11世紀前半、テュルクのオグズ族に属するセルジューク集団が、当時のイスラーム世界の中心部へと流入し、1055年にバグダード入城を果たした。

結果的に同世界でのテュルクの立場、あり方を大きく変える端緒となったこの動きについては、従来、同集団が当初から「カリフのしもべ」、「スンナ派の擁護者」としてあったため、それがその征服活動に利したという見方が多くなされてきた。しかし、セルジューク朝史に関する史料状況、研究状況を考慮すると、そのような見解は王朝史的なスタイルをとる史書への高い依存度の結果の産物ではないかと考えられる。

そこで本論では、セルジューク集団の実像解明にむけての探究の第一歩として、アラブ史家イブン・アルアシールにより、イスラーム世界全域を視野に入れての史書の編纂という意識のもとに著された *al-Kamil fi at-Tarikh* (『完史』) を用い、そこにテュルクの部族集団として初のイスラーム世界中心部への進出、その主体となったセルジューク集団がどのように描かれているのか検討を行った。

イスラーム世界において支配領域を拡大していく過程で、セルジューク集団には、果たすべき義務を履行することで「信仰上の忠誠心を示し」、アッパース朝カリフから同世界支配の正当性をとりつけようとする姿勢はみられなかった。そして、民族的、宗派的に多様な同世界の住民、諸勢力と相對する際にも、「スンナ派の擁護者」としての姿勢を前面に押し出して臨むということもなかった。そのためか、その到来を迎える側にも、宗派を行動の基準として対応し、スンナ派勢力としてセルジューク集団を好意的に受け入れるという動きは一切見られなかった。それどころか、しばしば過度の暴力行為をはたらいた、外来の異質な遊牧テュルクからなる集団への恐怖心から、各地でその支配受けいれを拒む動きが生じた。結局、1055年における同集団のバグダード入城も決して平和的なものとはならず、当初から、彼らの支配がイスラーム世界の人々に容易に受けいれられるということはまずなかったと言えるのではないか。

このように、*Kamil* の記述から見えてくるバグダード入城前後のセルジューク集団、彼らとイスラーム世界の住民、諸勢力との関わりの様相は、王朝史的な史書に描かれているもの、従来先行研究において提示されてきたものとはまったく異なったものとなっているのである。

ルイジアナ州における南北戦争前後のプランターの存続と没落——センサス分析に基づく南部社会の変化の検討

一八五〇年—一八七〇年——

茂筑 正彦

本稿はルイジアナ州の二つのパリッシュのセンサス分析を通じて、ルイジアナ州における南北戦争前後のプランターの存続と没落を検討するものである。序論では、南部のプランターが南北戦争後に支配層として存続したか没落したか、という問題設定を行なう。そして、存続説が成り立ちにくいとの想定の下にルイジアナ州を研究対象に選び、対象を絞り込む。第一章では、設定した問題に関わる研究史を概観する。そして、問題設定として、ウッドワードに代表されるリヴィジョニストの没落説と、ウィーナー、キャンベルに代表されるポストリヴィジョニストの存続説のどちらが、より妥当であるかという問いを立てる。第二章では、ルイジアナ州から綿花栽培地帯であるテンソー郡を選んでセンサスを分析する。プランターエリートの存続率については、ほぼ一定しているが比較的低い数値で推移していることから、存続か没落かの判断は保留する。他方で、同郡のその他の指標を見ると、非南部出身者と非農業従事者が、南北戦争後に台頭したことが明らかとなる。第三章では、同じくルイジアナ州から砂糖きび栽培地帯であるセント・メアリ郡を選んでセンサスを分析する。テンソー郡と同様に、プランタ

ーエリートの存続率が一定してはいるけれども比較的低い数値であることや、非南部出身者と非農業従事者が台頭することが明らかとなる。ただ、セント・メアリ郡では、テンソー郡と比べてさらに存続率が低く、またより多くの非南部出身者が台頭していること理由として、砂糖きび栽培の特性がありそうなることが明らかとなる。結論では、第二、三章の内容を受けて、第一章で設定した問題に答える。存続か没落かの判断は保留し、断定はしない。あえて言うなら、プランターエリートの存続率の数値が期間を通じてほぼ同じである点と、非南部出身者と非農業従事者の台頭が都分的であったという点から、どちらかと言えば、ウィーナー、キャンベルに代表される存続説の方が、少なくともルイジアナの二郡に関する限りは、より妥当ではないかとの結論に到達する。

中世後期における教育の一形態

——寺院で行われた俗人子弟教育を中心として——

石原 卓治

本論文では、室間中期以降にさかんになった、寺院において俗人子弟に対して行われた教育活動である「寺入」について考察を行った。「寺入」そのものの解明から社会的意味へと視点が変化している研究史像をふまえ、「寺入」の要因としての二点——目的としての背景、寺院と各家との関係という面での背景

―を探ること、及び中世教育史上の「寺人」の特性を探ることを問題の所在とし、「寺人」の意義について説明することを目的とした。「寺人」や在地における文芸活動がさかんになる十六世紀を中心としている。

毛利氏被官玉木吉保の自叙伝、『身自鏡』には在地の小寺院での「寺人」生活の様子が詳述されている。また、『多胡辰敬家訓』・『世鏡抄』などの当該期の家訓・教訓書には学問観・「寺人」観が記されている。これらを照らし合わせると、「寺人」生活は修養を重視した課程を有しており、吉保の「寺人」生活は中世において武家に求められた生活態度と性格を体現していた。武家としての職責にあたるに相応しい能力・性格を養うために成人前の時期を過ごすことが、武家子弟の「寺人」の目的であった。

また、『多聞院日記』には国衆や職人・商人子弟の「寺人」が記されており、寺院と各家との日常的な交流も確認できる。多聞院ほか、興福寺塔頭への「寺人」の背景として、①地縁（寺院の近隣に居住することを背景とした職業上の結びつき、及び、寺領荘園内に居住）②交流関係（特に寺院間・僧侶間の日常的交流）③寺院における縁者の存在、の三点が指摘できる。そして、先行研究では指摘されながらも詳細な検討が不十分である、「寺人」の背景としての師檀関係を、サツマヤ子弟を例にとって証明した。また、子弟は寺院における行事の祇候役であった「直垂着」「上下着」などとしても臨時に召し雇われた。「寺人」期間中・下山後を通じて、寺院内外における地域間・

身分間交流を実現し、寺院と社会との結びつきを担ったことが、「寺人」のもたらした社会的意味であった。

一方、『政基公旅引付』・『家忠日記』・『上井覚兼日記』には、在地における文芸活動の状況が記されている。特に、「寺人」経験もある上井覚兼は、文芸書の教授活動も行っている。それは参加者にとって、興味に応じて心易く取り組めるサークルのようなものであった。また、『康富記』・『看聞御記』からは、公家社会の教育形態を確認することができる。公家社会には生涯を通じて、その段階で必要とされる知識をその都度、素読と談義聴聞という手順、形態をとって習得してゆく教育形態が存在し、談義には「文化サークル」としての意味合いも多分にあった。「寺人」はこれらの文芸活動、教育形態とは異なり、自身の活動の基となる能力や性格を身につけるという意味合いをもつことが、中世教育史上の「寺人」の特性である。

中世後期の社会には各身分・階級が主体的に活動することが求められた。以上の考察から、中世後期における社会の動向の中での「寺人」の意義は、それぞれの職責と一生の活動にあたるに相応しい、主体的に生きる能力と性格の基を、成人前に、修養を目的として寺院生活のいとなみの中で形成することであると結論付けた。

小型狩猟具の再検討

—有舌尖頭器を中心として—

藤山 龍造

考古学において時代変化を捉える際には、新たな遺物、遺構など諸要素の出現に注目することが少なくない。本論で採りあげた先土器—縄文移行期においてもそれは例外でない。すなわち日本列島においては氷河時代終末期に土器や石鏃などの道具が出現するが、こうした現象を一つのメルクマールとして、先土器時代の終焉及び縄文時代の開始とされることが少なくない。

これら土器や石鏃の出現は、煮沸具と弓矢の獲得という食料獲得ならびに食料加工上の一大革新となった可能性がある（近藤義郎一九六五）。それだけに、これらの要素が導入される過程は積極的に研究の俎上にのせられてしかるべきである。しかしその一方で、これらの要素の出現のみにスポットライトを当ててゐるのでは当該期の様相を矮小化してしまう恐れがある。むしろこれら新来の要素が出現するなかで、在来のそれがいかに変容したかという点をも含めたうえで当該期を評価することが要求される。こうした観点から筆者は、石鏃が出現する一方で、在来の狩猟具がいかに変容したかという側面に注目することから、当該期の再評価を試みた。

石鏃出現期に認められる在来の狩猟具としては、一般に手槍先端部とされる槍先形尖頭器、そして投槍先端部とされる有舌尖頭器が知られる。本論ではとくに後者に関して著しく変化が現れる点に着目した。すなわち石鏃の出現と歩を合わせるようにして、有舌尖頭器が形態、機能、製作技法などの点において、次のように変化することを示した。すなわち石鏃が狩猟具の組成に加わり始め、また定着してゆく過程で、有舌尖頭器が大型資料と小型資料とに顕著に分化する現象を指摘した。そしてこの形態の分化は狩猟具としての機能性の分化に由来するものであると推察した。すなわち小型の有舌尖頭器は、従来の想定とは異なり、鏃としての機能を帯びることになる。また製作技法という側面においても、小型資料は石鏃のそれと近似していることを示した。

これらの分析をもとに、筆者は次の結論へと到達した。すなわち先土器時代から縄文時代への移行期において石鏃がもたらされるなかで、それまで主たる狩猟具の一つであった有舌尖頭器が様々な側面で影響をうけ、石鏃と同様に用いられるようになった。さらに言い換えるのであれば、石鏃出現初期においては、石鏃をそのまま導入するのではなく、むしろ在来の狩猟具を改変し、同様の用途に供していたと考えられる。このように、石鏃の出現によって在来の狩猟具が一様に置換されるという単純な構図を描くわけにはいかない。すなわち石鏃がドミナントな狩猟具となる前段階において、在来の狩猟具が変容し、用いられつづけるダイナミックなプロセスがここに示された。資料

的制約が著しい先土器—縄文移行期ではあるが、そうしたなかでもこうした様相が指摘された点は重要であると考えている。

二里头文化の形成過程にみられる初期王朝の様相

久慈 大介

紀元前3000年紀の後半から紀元前2000年紀のはじめにかけて、中国各地で発展していた龍山諸文化が相次いで衰退に向かうなか、中原では新たに二里头文化が成立する。

ではなぜ、各地の龍山諸文化が衰退していくなかで、中原のみがさらなる社会的発展をみせ、初期王朝へと連続するような文化を生み出したのであろうか。本論では、二里头文化形成の直接の舞台となった洛陽—鄭州一帯の中原地域における遺跡の分布状況を議論の主な材料とし、仰韶期、龍山期、二里头期という流れのなかで遺跡分布上にどのような変化が読み取ることができ、また、その遺跡分布状況の変化からどのような地域社会の動向が看取できるのかという点について分析を行った。

その結果、仰韶期から龍山期にかけて見られる最も特徴的な変化として、龍山期になると各遺跡群のなかに大規模な遺跡が出現するということが読み取れた。そしてそれは地域社会の統合化という文脈のなかで押さえていくことのできる現象であり、そのような大規模遺跡が各地域社会の「拠点集落」としての性格を持ち得るものと想定した。ただし、巨視的に中原社会全

体をとらえた場合、龍山期の中原社会においてはそうした地域社会が「横並び」の構造をもち、社会全体として大きな統合がなされたような様相はみられないことも同時に明らかとなった。

しかし、二里头期になると、多くの遺跡あるいは遺跡群が消滅するという遺跡分布上の変化が看取できる一方、洛陽平原付近にはひとつの大きな遺跡分布の「まとまり」が見られるようになる。そしてこの「まとまり」のほぼ中央、伊河・洛河に面した平原部に、二里头文化の中心遺跡である二里头遺跡が現れる。この二里头期にみられる遺跡分布上の大きな変化は、龍山期の中原においてみられた地域社会の「横並び」構造が、二里头文化の成立によって二里头遺跡という中心をもった構造へと変化し、二里头遺跡という「拠点集落」を中心とした中原社会の再編成、強い統合化がなされたことを強く示唆するものである。

また、二里头遺跡は単に中原地域の中心であるだけでなく、より広範な地域間関係の中における中心としての様相を垣間見せる。これは二里头文化の成立以前にみられた龍山諸文化間の相互的な地域間関係と対比すれば、非常に劇的な変化であり、かつ大きな「質的」な変化でもある。そこに中国史上最初の大きな歴史的飛躍性を読み取ることができるのではないだろうか。近年、環境考古学の進展により、龍山期後半から二里头期にかけて気候の寒冷化・乾燥化が起こったことが明らかになりつつある。では、そのような環境変化と、龍山諸文化の衰退および中原における二里头文化の形成といった現象には何らかの関

連性はあるのだろうか。本論では、中原の地理的、生態的環境に着目しながら、遺跡の分布、立地状況等の分析結果をもとに、この問題に關してもいくつかの考察を加えた。今後、二里頭文化の形成過程という問題について議論する際、ひとつの視点としてそのようなことも考慮に入れながら、さらなる分析を行っていききたいと考える。

奄美大島・小湊フワガネク遺跡における漁撈活動について

名島 弥生

琉球列島の島々は、美しいサンゴ礁によって縁取られている。サンゴ礁とは、造礁サンゴを主とする造礁生物が、平均海水温、塩分濃度、波浪の強さ、相対的海水準の変動など多くの条件に左右されながら、成長することによって形成されてきた地形である。このため島々を取り巻くサンゴ礁の性質は、場所によっても時代によっても様々であり、そうした多様性はそこで行われる漁撈活動にも大きな影響を及ぼしている。

しかしながら、琉球列島における従来の考古学研究においては、遺跡周辺に分布するサンゴ礁の個々の特質を詳細に検討することなく、先史時代の漁撈活動は、琉球列島一般に見られるサンゴ礁を中心に行われてきたものとして一括されることが多かった。本論はこのような点を考慮し、奄美大島・小湊フワガ

ネク遺跡を対象として、①出土魚種の分析に基づく考古学的情報、②遺跡周辺のサンゴ礁で行われる漁撈活動に關する民俗学的情報、③サンゴ礁地形発達史に關する自然地理学的情報を総合することによって、先史時代の漁撈活動を復元することを試みるものである。

奄美大島・小湊フワガネク遺跡は、検出された兼久式土器および共伴遺物の型式学的分析から、一四〇〇〜一三〇〇年前に位置づけられる。本遺跡出土の魚骨は、ブダイ科、ペラ科、フエキダイ科、ハタ科、ハリセンボン科などのサンゴ礁魚類が主体を成している。これらの動物考古学的分析結果から復元される当時の漁撈活動は、体長四〇〜六〇センチメートル前後の大型のブダイ科や、全長二〇〜三〇センチメートルのものから六〇センチメートル以上のペラ科、ハタ科、フエキダイ科を、主な捕獲対象としたものであったと考えられる。また考古学的遺物から推測される漁法としては、漁撈具と比定できる鉄製の釣針が二点検出されていることから、多様な漁法のうちのひとつとして、釣り漁が行なわれていた可能性が高いものと指摘できる。

このような漁撈活動は、いかなるサンゴ礁を利用して行なわれていたのだろうか。本論ではこの点について検討するため、出土魚種各種の遺跡周辺における現在の捕獲方法、および捕獲場所に關する民俗調査と、遺跡周辺に分布するサンゴ礁の空中写真判読、および現地踏査を実施した。琉球列島のサンゴ礁は裾礁と呼ばれ、陸側から干潮時にプール状の地形を成す礁池、

干潮時にほぼ干出する前方礁原、前方礁原の沖側先端部分の礁縁、礁縁の沖側で海底深く落ち込む礁斜面へと続く分帯構造を持つのが一般的である。遺跡周辺における現在の漁撈活動に関する民俗調査の結果によれば、体長六〇センチメートルに及ぶような大型のブダイ科は、このようなサンゴ礁のなかでも礁縁から礁斜面において行なわれる追い込み網漁や、潜水突き漁などによって捕獲されている。特に追い込み網漁は、魚群が出入りするのに十分な礁池と、網を仕掛けるのに適した幅の広い水路があり、凹凸のあまりない緩やかな礁斜面の広がるサンゴ礁でなければ難しいと言われる。ペラ科、ハタ科、フェフキダイ科なども同様に発達した礁斜面付近で捕獲されるが、これらの魚種は網漁で捕獲されることはほとんどなく、主に釣り漁によって捕獲されている。

遺跡周辺においてこのような漁撈活動に最も適したサンゴ礁が見られるのは、遺跡の面する湾の南東端から湾外側に位置するイスピラと称される漁場である。空中写真判読と現地踏査の結果、イスピラのサンゴ礁は広大な礁池があり、緩やかな礁斜面が広がっている十分に発達した裾礁であることが明らかとなった。遺跡周辺にはこのほかに、湾内側に位置するトゥリイソ、ナモと称される漁場がある。しかしながら湾内側に面するこれらの漁場のサンゴ礁は、新鮮な酸素や栄養分を供給する強い波が受けられないため、イスピラほど発達していない。トゥリイソのサンゴ礁には礁池がなく、ナモでは礁斜面の凹凸が激しい。このためこれらの漁場は、大型のブダイ科の追い込み網漁など

には適さないものと考えられる。

このような現在のサンゴ礁の分布状況は、サンゴ礁地形発達史に関する自然地理学的成果によると、本遺跡が形成された一四〇〇〜一三〇〇年前においてもほぼ同様のものであったと指摘できる。喜界島、沖永良部島、水納島、沖繩島、渡名喜島、久米島などで行なわれたサンゴ礁地形発達史に関する自然地理学的調査の報告によれば、いずれの地域でも約七〇〇〜六〇〇年前には相対的な海水準の上昇に伴って、サンゴ礁の上方成長の開始が認められる。その後、海水準の低下もしくは停滞に伴って側方成長に転じ、前方礁原を拡大しつつ、隆起傾向のある場所では、発達の途上で離水し、完新世離水サンゴ礁の段丘面を形成している。しかし総じて約二〇〇〇年前以降には、海水準は現海面へと近づき、礁原の形態も現在とほぼ変わらないう状態に落ち着くものとされ、本遺跡周辺のサンゴ礁についても、地理的環境の実態から、従来指摘されていた発達過程から逸脱することはないものと考えられる。従って本遺跡における一四〇〇〜一三〇〇年前の漁撈活動も、現在とほぼ同様のサンゴ礁を漁場として行われていたと言える。

以上、本論における分析の結果、本遺跡における一四〇〇〜一三〇〇年前の漁撈活動は、湾の外側に発達したサンゴ礁の緩やかに広がる礁斜面付近を主要な漁場とし、追い込み網漁や潜水突き漁による大型のブダイ科の捕獲や、釣り漁によるペラ科、ハタ科、フェフキダイ科などの捕獲が行なわれていた可能性が高いものと考えられる。本論はこのように、考古資料の分析に

加え、遺跡周辺のサンゴ礁で行なわれる漁撈活動に関する民俗調査の結果と、琉球列島におけるサンゴ礁地形発達史に関する自然地理学的研究成果から、奄美大島における一四〇〇〜一三〇〇年前の漁撈活動を、漁場の様相を中心に描き出したものである。今後は同様の手法を用いて、空間的にも時間的にも多様な琉球列島のサンゴ礁と、それらの地域的特質を反映した漁撈活動の変化について明らかにしていきたい。

二〇〇一年度卒業論文題目

「日本史学専攻」

近世長崎の内町と外町

飯沼 朋之

幕末期（文久〜慶応）における福沢諭吉の政治意識

石崎 健文

近世における日米漂流民について

遠藤香奈子

尾州茶屋家の役割

遠藤由樹子

石原莞爾の賛美にみる日本社会の官僚的構造と

責任回避の精神

岡村 洋祐

古代史の中の宗像君氏

落合真由美

明治維新と武家社会

鎌野 行

織田・上杉間の外交交渉と奏者

杏 由利子

十九世紀初頭の蝦夷地の防備体制

—文化五年仙台藩の蝦夷地出兵を例にあげて—

黒川 純

近世における富籤

—江戸の御免富を中心にして—

桑野 琢也

北一輝の思想について

斎藤 高一

「コロコロコミック」

—メディアとしての「マンガ」史—

佐藤 裕一

夜刀神説話について

塩田 正史

三井財閥に見る人事・雇用制産の形成

柴田 彰

下総牧と地域支配

菅瀬 優生

上杉氏における偏諱授与に関する考察

武知 成明

近代日本における対中呼称の変遷

—「支那」という呼称を巡る外交交渉を中心に—

田部井 健

『帝室論』における福沢諭吉の思想と考察

—Walter Bagehot 'The English Constitution'—

との比較において—

千葉 大至

五月五日節の行事習俗

徳山 秀明

古墳時代の日向

富永 亜紀

『脱亜論』とその背景

—福沢諭吉から見た近代東アジア—

永森 崇浩

三多摩東京府移管問題について

早川 次郎

南北朝時代の公家社会についての考察

日本古代の対外交渉の諸相

平林みどり

古代官廷人の衣服の変遷

新選組の評価

広田 亨

—女性を見た「戦争」と「日本」—

『田舎青年』における山本滝之助の思想

古川 祐子

戦国大名伊達氏における鉄砲の受容とその利用

—政宗期を中心に—

増田 典子

律令軍事制度の変遷について

—桓武朝の軍事政策を中心に—

宮川 奈緒

村岡 路子

森 仁隆

〔東洋史学専攻〕

夏王朝の虚実をめぐる研究

諸隈 康浩

廬山会議―彭徳懷はなぜ失脚したか―

大森麻里子

青銅器紋様から見る殷代の祭祀対象について

中塚 真幸

中華人民共和国の文物観の変遷
戦後台湾における初等教育の変遷

伊勢 恵子

覇者は何故王者になれなかったのか

品川 礼文

―台湾史教育を中心に―

近藤 綾

荀況の礼概念に見る法家的側面の追求

鈴木 夏峰

観光都市香港の発展

江藤 玲子

『韓非子』における道家系諸篇の意義について

伊藤 彰洋

―コンベンション開発の転換期を中心に―

久保田正之

漢代における民爵制度について

三木田哲理

九七年返還問題からみる

山本 美穂

―西嶋爵制論に対する一考察―

遠藤 章代

香港中国人のアイデンティティの変容

田中めぐみ

漢代中国の衣服の制度と龍の成り立ちとの関係について

佐藤 妙子

イスラム地域の音楽とその影響

マイイ・ズイヤードとその時代

燭龍は世界を表象するか

佐々木孝人

―二〇世紀前半におけるエジプトのシリア・レバノン
移民コミュニティとフェミニズム運動の展開―

道咸期の官僚張集馨に関する一考察

中川 恵

アンダルス土着住民のイスラム改宗についての考察

三善 康正

天保六年長崎唐館騒動事件について

米川 丈士

スーフィーたちの舞

―メフレヴィー教団のシャーマニズム的要素を探る―

―日中関係史の一場面―

笠井 秀樹

イスラーム都市コルドバの独自性

―コルドバの大モスクの特質と都市における役割―

呉昌碩の二側面

鳥越 香織

カザフスタンにおけるロシア人とカザフ人の民族性

―アルマニータ事件以降を中心に―

―新たな呉昌碩像確立を目指して―

小川 景子

マラッカ勃興期の東南アジア

楠瀬 規和

第一次国共合作崩壊後の中国共産党の組織問題

一九二七―一九三〇

富田事変に関する一考察

―贛西南特別委員会第二次全体会議を中心に―

第一次国共合作における中国共産党

小川 景子

園本しのぶ

―日本の観点から―

堀口 隼

富田事変に関する一考察

堀口 隼

―贛西南特別委員会第二次全体会議を中心に―

堀口 隼

儲安平の理想と共産党における自由化の限界

堀口 隼

―贛西南特別委員会第二次全体会議を中心に―

堀口 隼

儲安平の理想と共産党における自由化の限界

堀口 隼

―国際交易とイスラーム化―

山口 元樹

一六世紀、オスマン帝国の地中海戦略と海軍

渡部 彰一

英領マラバールにおける「マーツピツラ暴動」

猪野 甲紀

「白バラ」

―ナチス支配下における若き抵抗者たち―
産業革命期におけるイングランド銀行の役割

赤澤 千尋

赤田 英昭

―その特徴と意識―

―ズールがマムルーク支配体制の崩壊に果たした

役割と可能性―

高橋 亮太

一五―一七世紀におけるイスタンブールのベデステン

藤木 健二

T・E・ロレンス 虚像と実像

井関 啓介

一九〇八年、アナトリア鉄道労働者のストライキ

小川 琢磨

アルカラの「降伏文書」から見る

―三世紀バレンシア南部の征服

里見幸一郎

オスマン帝国支配期ボスニアの改宗問題

―人々はなぜイスラームを受容したのか―

山口 和弘

オスマン朝マラシユ・サンジャクにおける都市分析

由利 桃子

〔西洋史学専攻〕

王権の表象としてのヴェルサイユ宮殿

―「鏡の間」天井画の主題変更について―

青木 恵

ニクソン訪中に見る日米関係

小島 洋平

ヴィクトリア朝におけるジェントルマンと中流階層

金子 泰弘

アメリカ合衆国における優生学の歴史

―イギリス優生学の伝播からアメリカ優生学の

終焉までの歴史的展開―

西原 数馬

三視点を通して―

秋山 素子

トゥルバドゥール芸術の起源の問題について

―なぜアラビア起源説は決定的な説となりえないのか―

安藤 千枝

危機の時代における十六世紀末のロマンの謝肉祭

にみられる祝祭の役割と性質

石塚 奈月

近世フランスにおけるガレー船徒刑囚

―ガレー船団の存在意義と徒刑囚たちの生活について―

石橋 克将

ハイネとユダヤ主義

井上 貴恵

政治家ダンテの国家・社会観

十六世紀カルロス一世統治下におけるインディアス問題

内田 智子

―王室が人道主義的でありえた時―

ガヴァネス問題とフェミニズム

宇野 恭子

アフアーマティヴ・アクション

―一九六〇年代以降のアメリカにおける差別撤廃措置―

小名木裕香

ニーチェ思想の歪曲

堅田万記子

—「力への意志」と「権力への意志」—
近代フランスにおける読書の傾向

川島 知子

—エンゲルスの視点との比較で—
一八世紀ロココ期フランス宮廷における女性の服飾

米村 義剛

—一七、一八世紀を中心に—

佐原 昭浩

留守 曜子

チリ・アジェンデ政権崩壊の要因について

杉原 祐之

後期モーゼス・ヘスにおけるユダヤ人問題

鈴木 由子

〔民族学考古学専攻〕

禁酒法、革新主義的解釈と非革新主義的解釈についての

高野征太郎

立川ローム期の石器石材利用について

佐野 正裕

一考察

滝野沢友理

縄文時代の堅果類の出土傾向について

杉山 裕

メキシコ独立戦争におけるイダルゴ蜂起の意義

田嶋かおる

住居の増改築現象およびその意味に関する一考察

和泉 大介

十三世紀イングランド王権に関する考察

立花 大

先土器時代の礫群研究史

井橋 興蔵

—エドワード一世治世における王権—

飛田 大典

関東地方におけるカマドの出現について

鳥田麻紀子

十九世紀インドにおける植民地支配

仲丸 英起

鷄形埴輪の諸問題

芹川 祐美

十六世紀イングランド議会の機能と構造

中村 志保

殷墟背甲甲骨における材質選択について

田中 春香

冷戦の発生について

南雲 淳一

古代集落遺跡出土の墨書土器研究

池山 由宣

—ウイリアムズとケナンの比較を通じて—

西谷 利明

お辞儀の身体表現

青山 杏

ビスマルク失脚に関する一考察

長谷川 敬

—その起源・伝播・流行と背景を中心に—

荒井 真美

一八世紀の都市ボルドーの発展とその特質

廣瀬 俊彦

東京大学本郷構内遺跡出土の江戸時代磁器について

岡本 潤

—商業を中心に—

松見早枝子

琉球の羽衣伝説における松のモチーフ

丸山 尚子

ガリアの「危機の三世紀」

西村 昌英

ジョン・ハントの描いた多元的フイジー人像

西村 昌英

—潜在的な社会不安に関する一考察—

その時期的変遷

—「The Life of John Hunt」の分析を通して—

瀨川オリザ

ポヘミア社会とフス派革命運動形成の考察

小林 博文

アイヌ文化期の回転式銚頭における材質利用と

小西 樹新

十九世紀フランス、ブルジョワジーとデパート

観光を通じた伝統の再生—玄海灘R島を事例に—

レイブの研究—Non Placesについての—一考察—

小西 樹新

—ボン・マルシェを中心に—

英国における労働者階級の状態

レイブの研究—Non Placesについての—一考察—

小西 樹新

18世紀水洗トイレ誕生から衛星トイレシステム

成立までの諸都市の動向

丸山 仁美

北部低地マヤにおけるチュルトウン遺構

佐々木 毅

—石灰岩地帯の水資源利用の観点から—

富男 浩士

北海道アイヌにおけるシカ送り

—雑誌分析に見る女暴走族(レヴィス)から—

相 知広

忍者の歴史に見る火術の発展

飯塚 陽平

神奈川県の装飾横穴からみる古代の様相

井本 雄平

アメリカ合衆国創造論(Creationism)運動史における現代

創造論運動組織成立のもたらした意義について

大八木省悟

タイ・バンコクにおける「ロッド・ケン」調査

吉田 美希

—地域的特色の相違点を考える—

—御嶽神社例大祭における池袋三丁目親交町会を

湯川 信次

事例に—

古代ローマの水道に見られる建築技術と

濱口 聡

建築資材の変化について

—アテン神殿の特徴を中心に—

小室 望

古代ギリシャ世界のライア

—アッテイカ式壺絵の分析を通じて—

脇田隼太郎

記念碑建立から見るの領土拡大とその概念

小松 佳央

三田史学会常任委員・委員

常任委員

会長 鈴木公雄

庶務 中島圭一、長谷部史彦、藤田苑子、佐藤孝雄

編集 坂井達朗、山本英史、吉武憲司、阿部祥人

會計 長谷部史彦

會計監査 東畑隆介、宮崎 洋

委員

(日本史) 井奥成彦、鈴江英一、田中康雄、西岡芳文、松崎欣一、湯淺吉美

(東洋史) 尾崎 康、嶋尾 稔、野元 晋、三沢伸生、山城喜憲

(西洋史) 坂口昂吉、田辺三千廣、宮前安子、米田 治

(民俗学考古学) 杉本智俊、高山 博、近森 正、藤村東男